

## はじめに

ECERS（読み：エカース）とは*Early Childhood Environment Rating Scale*の略称で、1980年にアメリカで開発された保育の質を総合的に測定するスケールです。1998年に改訂版のECERS-R、2005年にはアップグレード版が発行されました。本書は、それに続くもので1998年の改訂版以来の大きな改訂版である第3版、つまりECERS-3の日本語訳です。

ECERS-R（1998）の日本語訳『保育環境評価スケール①幼児版』（2004年）は、刊行以来『保育環境評価スケール②乳児版』とともに、日本の保育現場でも使われるようになりました。訳者である私は、スケールを用いて午前中に約3時間の共同観察を行い、午後は結果の検討を行うという形のコンサルティングを十数年にわたり続けています。

スケールを用いて「点数をつける」という行為は、保育という営みにはそぐわない、なじみにくいものにみえるかもしれません。しかし実際には、項目や指標をもとに保育を「みつめる」ことは自らの保育を問い直すことであり、「なぜその点数になったか」の根拠を示すことは、とりもなおさずその保育者の「保育に対する思い」の発露であり、スケールの使用は保育に対する1人ひとりの保育者の「語り」を生むものでした。スケールを使った人からは、しばしば「点数は問題ではない」という言葉が出てきました。

時は流れ、1998年当時より保育をめぐる状況が変わり、多くの新たな研究が生まれ、あるいはスケールが実践のなかで多くの人々により「揉まれ」、国際的な幼児教育の潮流も踏まえて、2015年にECERSは改訂されました。改訂版ECERS-3の内容は、正直なところECERS-Rで使いづらかった点が改善され、「保育者と子どもの関わり」と「関わりを通して育まれる子どもの学びに向かう力」が強調されるものとなっていました。

これは個人的な見解ですが、ECERS-3の内容は日本の幼児教育がめざそうとする方向とかなりの部分重なるのではないのでしょうか。また、日本の保育で大切にしてきたことにスケールという「物差し」をあててみると、何を大切にしてきたかが浮き彫りになるともいえるでしょう。スケールでは測りきれないものもみえてくることでしょう。

このたび、同志社女子大学より出版助成金を得て本書を刊行することができました。ここに記して感謝の意を表します。

2016年8月

埋橋玲子